

地域で生活する精神障害者の「親亡き後」に関する認識

石川 かおり 葛谷 玲子 高橋 未来

Perceptions of “Life After the Death of Parents” Among Community-dwelling Individuals with Mental Disabilities

Kaori Ishikawa, Reiko Kuzuya and Miku Takahashi

● 要旨 ●

本研究の目的は、地域で生活する精神障害者の「親亡き後」に関する認識を明らかにし、支援のあり方について検討することである。

地域で生活している精神障害者 12 名を対象に「親亡き後」に関する認識について半構造化面接を実施し、質的帰納的に分析した。

精神障害者の「親亡き後」に関する認識として、【「親亡き後」に関する不安】【「親亡き後」に関する肯定的な見通し】【「親亡き後」に向けて備えている状況】【「親亡き後」に向けて備えていない状況】【「親亡き後」に向けた要望】【「現在」の充実・安定】【「親亡き後」のことへの取り組みづらさ】【「親の介護」の不安】【「自分の老後」と「自分亡き後」の心配】の 9 つのカテゴリを明らかにし、精神障害者の「親亡き後」に関する認識の全体像を導出した。

支援のあり方として、「親亡き後」についての話しづらさを考慮して段階的に「話すこと」を支援すること、「現在」の生活の充実と安定が「親亡き後」の肯定的な見通しにつながるため「現在」に焦点をあてて支援すること、親の介護や自分の老後の心配も「親亡き後」の不安と地続きであるため長期的なライフプランを共に考えることが示唆された。

キーワード：精神障害者、地域生活、親亡き後、認識

I. 緒言

2004年に示された精神保健医療福祉の改革ビジョン以降、わが国の精神障害者のケアは施設中心から地域ケア中心へと転換しつつあり、今後は更に在宅で生活する精神障害者が増加することが期待されている。2017年には、「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築を目指すことが明示され（厚生労働省, 2017）、精神障害者の地域生活支援の更なる充実が課題となっている。

日本では、地域で暮らす精神障害者の7割以上が家族と同居しており、そのうち67.8%が親と同居

している（厚生労働省, 2018）。精神障害者の家族は、特に親の立場から自分が死去した後の子ども（精神障害者）の生活について不安や心配を抱えており、これらは「親亡き後」と称され、家族にとっては大きな関心事である。家族の不安や心配は、内服管理や疾患管理のほか、金銭管理、生活リズムの維持、家の管理、相続や財産の管理、人づきあいなど多岐に亘る（地域精神保健福祉機構, 2017；石川ら, 2021；石川ら, 2022；猿田ら, 2010）。こうした「親亡き後」のさまざまな問題について、支援マニュアル（大分精神障害者就労推進ネットワーク, 2015, 2016）や当事者、家族、専門家らの体験等をまとめた書籍（地域精神保健福祉機構,

受付日：2024年9月7日 受理日：2025年1月17日
岐阜県立看護大学 Gifu College of Nursing

2017)などが少しずつ作成されており、親亡き後の当事者の生活を見据えて親が行っている準備や試みの一端も明らかにされている(吉岡ら, 2019)。しかし、家族は様々な不安を抱えていても、「親亡き後」のことにについて他者に相談したり、精神障害を持つ本人と十分に話し合ったりすることができず、不安を先送りしている現状も示されている(石川ら, 2022)。

これらのことから家族と障害者が「親亡き後」について将来の見通しを持てるような何等かの支援の必要性が示唆されているが、「親亡き後」のことは、親をはじめとする家族の立場から語られることが多く、このような支援について検討するためには、精神障害をもつ当事者の視点からも検討する必要がある。また、実際の支援においては、当事者の不安や心配だけでなく、目標や希望などストレスにも焦点をあてることや本人の意思を尊重することが重要であると考えられる。しかし、当事者を対象としたアンケート調査(地域精神保健福祉機構, 2017)では、「親亡き後」の心配に焦点が当てられており、「親亡き後」の生活をどのようにしていきたいと考えているか、「親亡き後」に向けてどのような準備したいと考えているか、どのような支援を望んでいるかなどについては明らかにされていない。そのため、支援について検討していくためには、心配や不安だけでなく当事者の強みや意思につながるようなこれらの視点も含めて、精神障害者の認識の全体像を明らかにする必要がある。

II. 研究目的

本研究では、地域で生活する精神障害者が「親亡き後」についてどのように捉えているのか、その認識の全体像を明らかにし、支援のあり方について検討することを目的とした。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、地域で生活する精神障害者の「親亡き後」に関する認識の全体像を探索的に明らかにすることを目的としているため、仮説生成型の質的研究方法を用いることとした。

2. 研究参加者

研究参加者の選定条件は、研究目的と倫理的配慮を踏まえて①病状が安定していて地域生活を1年以上継続している、②ピアサポート活動等を通して自分自身の体験や考えを他者に語ることにある程度慣れている、③20歳以上、④本研究への参加の同意について自分で意思決定して伝えることができる、⑤親との同居の有無および親が健在かどうかは問わない、とした。

これらの条件を満たす参加者を募集するため、研究目的にそって選択する意図的サンプリングとボランティアサンプリングを併用した。具体的には、研究協力の得られる可能性のある、精神障害者のピアサポート活動を支援している施設を意図的に選択し、施設の協力を得て、上記の選定条件に見合う利用者を対象に意図的に研究参加者を募集した。なお、研究参加者の偏りを防ぎ、多様性を確保するという観点から、依頼する施設は複数選択した。

3. データ収集

本研究では参加者の「親亡き後」に関する主観的な認識に焦点を当てているため、インタビューガイドを用いた半構造化面接によりデータを収集した。

インタビューガイドの内容は、研究目的を踏まえて、「親亡き後」のことにについて考えていることや思っていること、親亡き後に向けて親や家族と話していること、親亡き後に向けて必要な支援などを設定し、これらの質問を投げかけながら、参加者が自由に語ることをできるよう配慮した。なお、両親共に他界している対象者には、親が亡くなる前に考えていたことを想起して語ってもらうよう依頼し、語られた内容について、親が亡くなる前に考えていたことかどうかをその都度確認しながらインタビューをすすめた。併せて、参加者の属性データ(参加者の年代、家族構成・年代、同居の有無、罹病期間)を聞き取った。面接は参加者が利用する施設内のプライバシーが保たれる部屋で実施し、面接時間は一人あたり平均46(35-60)分であった。語りの内容は許可を得てICレコーダーにて録音し、逐語録に起して分析データとした。

データ収集期間は2018年12月～2019年6月であった。

4. データ分析

逐語録を熟読し、「親亡き後」に関する認識に関連する語りを、意味が読み取れる範囲をひとまとまりとして抽出し、コードを作成した。その際、他の参加者と内容が同じものは同一コードとした。コードの意味内容が類似するものを集約してサブカテゴリ、カテゴリを生成した。サブカテゴリ化/カテゴリ化の際は、コードやデータに戻って意味内容を再度確認し、近似のサブカテゴリ/カテゴリはないか、相対するサブカテゴリ/カテゴリはないか、相互に影響し合うサブカテゴリ/カテゴリはないか、サブカテゴリ/カテゴリが示す事象の時間的な流れはどうか等の視点から、気付いたことを分析メモに書き留めながらすすめた。そして、分析メモの内容を踏まえてカテゴリ同士の相互の関連性を同定し、全体のバランスを考慮しながらカテゴリを配置し、関連性を示す記号を付して「地域で生活する精神障害者の親亡き後のことに関する認識」の全体像を示す関連図を作成した。

分析のプロセスにおいて解釈の妥当性を共同研究者間で確認しながらすすめた。また、質的研究の経験を持つ精神看護学領域の研究者1名から妥当性に関するスーパーバイズを受けた。

5. 倫理的配慮

研究開始前に岐阜県立看護大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：0222, 承認日：2018年9月）。研究目的および方法、研究参加のメリット・デメリット、参加者の権利（自己決定、プライバシー、害されないこと、研究拒否や中断等）、研究者の義務等について、書面と口頭によるインフォームド・コンセントを徹底した。そして、個人データを加工し匿名性の保護を厳守した。さらに、研究参加による時間的制約、疲労、病状などに十分配慮した。また、参加募集の際は施設のスタッフの協力を得て行ったが、参加協力が前提ではないことをスタッフに強調して伝えた。対象候補者に依頼する際には、研究に参加するかどうかは自由意思であり断っても良いこと、断っても不利益がないことを伝えて、意思決定においてスタッフの力が及ばないように十分配慮した。

IV. 結果

1. 研究参加者の概要

研究参加者の概要は表1のとおりである。参加者は2つの施設から募り、研究参加の同意が得られた12名であった。性別は男性7名、女性5名、年代は30代が3名、40代が5名、50代が4名であった。家族と同居している者が6名、独居が6名で、両親とも他界している者は2名であった。罹病期間は2～35年と幅があった。

表1 研究参加者(12名)の概要

性別	男性7名 女性5名
年齢	30代：3名 40代：5名 50代：4名
親の状況	両親とも健在：7名 片親のみ健在：3名 両親とも死去：2名
同居の有無	親と同居：6名 独居：6名
罹病期間	平均22.08年 (2-35年)

2. 「親亡き後」に関する認識の内容

分析の結果、85コードから30サブカテゴリ、9カテゴリを生成した。コード、サブカテゴリ、カテゴリの一覧を表2に示す。以下、コードを []、サブカテゴリを < >、カテゴリを 【 】 として表記し、カテゴリごとに分析結果を説明する。

なお、本研究は研究参加者の認識を明らかにするものであるため、抽象化されたカテゴリについて研究参加者の語りをを用いて紹介する。斜体部分は、対象者の語りの一部を、意味を損なわない程度に加工し再構成したものであり、(#1～12)は対象者のID番号を示す。

1) 「親亡き後」に関する不安

【「親亡き後」に関する不安】には、[収入が得られるかわからない] [年金だけでやっていけるかわからない] など<経済的な見通しが曖昧である>こと、[このまま自宅に住み続けられるのかわからない] [一人暮らしのアパートが見つかるのか心配] など<住まいが不確定である>こと、[薬をきちんと飲めるか心配] [規則正しく生活できるか不安] など<療養生活上の心配がある>ことが含まれていた。また、[心の支えや頼りがなくなるのが心配] [さみしさや喪失感が心配] など<心理的喪失感が心配である>や [お墓をどう

表2 「親亡き後」に関する当事者の認識

カテゴリ	サブカテゴリ	コ	ー	ド
「親亡き後」に関する不安	経済的な見通しが曖昧である	・収入が得られるかわからない ・年金でやっていけるかわからない	・固定資産税が払えるかわからない ・就職できるか心配	
	住まいが不確定である	・このまま自宅に住み続けられるかわからない ・グループホームに入れるかわからない	・一人暮らしのアパートが見つかるのか心配	
	療養生活上の心配がある	・薬をきちんと飲めるか心配 ・料理が作れるかが心配	・規則正しく生活できるか不安 ・お金のやりくりができるか不安	
	心理的喪失感が心配である	・心の支えや頼りがなくなるのが心配 ・気持ちを聞いてくれる人や場所がない	・さみしさや喪失感が心配	
	親の供養の心配がある	・お墓をどうすれば良いかわからない	・仏壇をどうすれば良いか心配	
	利用できるサポートの知識がない	・ヘルパーは家事をどこまでやってくれるかわからない ・心理的サポートは得られるか	・後見人制度のことがわからない ・介護保険のことがわからない	
「親亡き後」に関する肯定的な見通し	「親亡き後」も何とかなる	・一人暮らしは未経験だが何とかなると思っている ・今一人暮らしができていますので何とかなる	・ヘルパーや介護制度の相談をすれば生活できそう ・就職できれば何とかなる	
	「親亡き後」も相談できる安心感がある	・困ったときに相談にのってくれる支援者が身近にいるので安心 ・相談すれば一人で何とかしなくてもよいという安心感		
	「親亡き後」に向けて親が準備してくれる安心感がある	・いざとなったら大丈夫なように親が準備してくれるという安心感 ・親は終活をしている ・親の死後に自分が困らないように親が保険に入っている		
「親亡き後」に向けて備えている状況	お金を貯める	・お金を貯めている	・生命保険をかけている	
	就職の準備をする	・自分に合った仕事を探す ・就職を目指して就労支援事業所に通っている	・ハローワークに行く	
	生活スキルを高める	・家事をする	・料理ができるよう練習している	
	周囲との関係を築く	・近所づきあいをする ・職場の人の信頼を得る	・友達と助けあう ・人との接し方に気を付ける	
	「親亡き後」について話す	・「親亡き後」について親と話す	・仲間内で「親亡き後」について話す	
「親亡き後」に向けて備えていない状況	「親亡き後」の準備はしない	・一人になっても何とかなると思うので準備はしない	・「親亡き後」の具体的なことは考えていない	
	「親亡き後」について話題にしない	・「親亡き後」について親と話していない	・「親亡き後」のことに友達や仲間と話さない	
	「親亡き後」は考えないようにしている	・親が死ぬことはあまり考えないようにしている ・今考えても先のことは分からないのでその時が来たら考える		
「親亡き後」に向けた要望	経済面や住まいに関する支援があると良い	・住まいのバリエーションが増えると良い ・グループホームに入れるとよい	・お金の心配をしなくて良いように支援があると良い	
	「親亡き後」の相談にのってほしい	・困ったときに相談にのってもらいたい ・「親亡き後」の生活で必要となる手続き等を手伝ってもらいたい	・「親亡き後」のことに友達や仲間と話さない	
	親に準備してほしいことがある	・親には「親亡き後」も心の支えになるもの（手紙など）を残してほしい ・事前に財産目録を作っておいてほしい		
	現在の支援を継続して受けられると良い	・現在受けている支援を継続して受けられると良い		
	「親亡き後」の生活の実際を知りたい	・実際に親が亡くなった人はどのように生活をしているのか知りたい		
「現在」の充実・安定	現在の生活が充実・安定している	・今の生活は充実している ・夢や目標がある	・今の生活は安定している	
	現在は病状が安定している	・症状のコントロールができています ・薬をしっかりと飲んでいる	・ストレスや睡眠に気を付けている ・規則正しい生活をして体調を整えている	
	現在は適切なサポートがある	・親やきょうだいと話ができる関係性がある ・現在必要な支援を得て生活基盤がある	・家族の理解や協力がある ・困ったときに助けてくれる仲間、友人、恋人がいる	
「親亡き後」のことへの取り組みづらさ	「親亡き後」の生活を想像できない	・「親亡き後」について意識したことはない ・一人暮らし経験がないので「親亡き後」の生活で何に困るかわからない ・親は若く元気だから考えたことがない		
	「親亡き後」について家族と話にくい	・「親亡き後」について話すのは親に失礼だと思う ・本当は「親亡き後」について話したいが親とは話にくい ・親は「親亡き後」についてあまり考えていないので話にくい ・「親亡き後」についてきょうだいとは話にくい		
「親の介護」の不安	「親亡き後」よりも「親の介護」が不安である	・「親亡き後」よりも親の病気が心配	・「親亡き後」よりも親の介護が不安	
「自分の老後」と「自分亡き後」の心配	「自分の老後」の心配がある	・自分が年老いたときに今と同じように生活できるか心配 ・老後に自分が弱ったときに子どもと暮らせるかどうか不安 ・高齢になったら老人ホームに入った方が良いのか ・認知症にならないか心配 ・身体疾患や持病の再発が心配		
	「自分亡き後」の家族の状況が心配である	・自分が死んだときに家族に負担や迷惑をかけないようにしたい ・自分の親のことよりも自分が死んだ後の子どものことが心配		

すれば良いかわからない] [仏壇をどうすれば良いか心配] といった<親の供養の心配がある>も述べられていた。さらに、[ヘルパーは家事をどこまでやってくれるのかわからない] [後見人制度のことがわからない] など、親亡き後に<利用できるサポートの知識がない>ことも含まれていた。以下は、60代の母と同居している40代男性の<経済的な見通しが曖昧である>についての語りである。

…すぐには言わないんですが、やっぱり仕事、収入を得るといことは必要な。僕自身はここ(利用している施設)が好きなんです、やっぱり無収入ではいられないというのも頭では分かるので。スタッフともたまにハローワークへ行ったりしてます。やっぱりお仕事ですね。今は障害年金ももらっていますが、年金にやっぱりプラスアルファがないと、とても金額的に足らないので。それがどうなるのかわからないから心配といえば心配… (#10)。

2) 「親亡き後」に関する肯定的な見直し

参加者は1)の不安や心配の一方で、【「親亡き後」に関する肯定的な見直し】についても語っていた。[一人暮らしは未経験だが何とかかなると思ってる] [ヘルパーや介護制度の相談をすれば生活できそう] など<「親亡き後」も何とかかなる>という思いや、[困ったときに相談に乗ってくれる支援者が身近にいるので安心] [相談すれば一人で何とかしなくてもよいという安心感] といった<「親亡き後」も相談できる安心感がある>が語られた。また、[いざとなったら大丈夫なように親が準備してくれているという安心感] [親は終活をしている] など<「親亡き後」に向けて親が準備してくれる安心感がある>も含まれていた。以下は、70代の両親共に健在で独り暮らしをしている50代女性の<「親亡き後」に向けて親が準備してくれる安心感がある>についての語りである。

…両親はいつ自分たちが死んでもいいように、終活をしていたんです。「遺影写真を撮ってある」とか「ここの葬儀屋さんに電話してもらえばいいよ」とか「家族葬でいい」とかそういう話もして。断捨離もしてまして。終活は両親が2人で話し合っ、自分たちで準備して。もしもの時に備

えて、通帳や大事な物も「ここにあるからね」というふうに合鍵を渡してもらっている、安心してる。親はそういう話をもうしておいたほうが安心だと思ってやっているんだろう。困るのは子どもたちだからというのも分かっていると思うので。親から終活の話聞いたときは「親はそういうことを考える年になったんだな」と思ったんですが。もっと親を大事にしないと、長生きしてほしいというふうに思いましたね… (#6)

3) 「親亡き後」に向けて備えている状況

【「親亡き後」に向けて備えている状況】として、[お金を貯めている] [生命保険をかけている] といった<お金を貯める>こと、[自分に合った仕事を探す] [ハローワークに行く] など<就職の準備をする>ことが語られた。また、[家事をする] [料理ができるよう練習している] など<生活スキルを高める>ことや、[近所づきあいをする] [友達と助け合う] など<周囲との関係を築く>ことにも取り組んでいた。さらに【「親亡き後」について親と話す】 [仲間内で「親亡き後」について話す] といった<「親亡き後」について話す>ことも含まれていた。以下は60代の両親、弟と同居している30代の女性の<生活スキルを高める>についての語りである。

…すぐにどうこうという感じじゃないけれど、いずれ先に逝くのはお父さんとお母さんなので。弟と仲良く、けんかしないように、よく言われますね。だから「ありがとう」を大切にしています。親が亡くなったらと考えるようになったのは、母に癌が見つかったからです。最初はショックでびっくりしちゃったんだけど。きつと治ると信じています。(中略) 親が亡くなった後の生活を考えたときに、夏に母が作ってくれる梅ドリンクを自分も作れるかなとか、料理できるかなとか心配な点もあるんですけど、ぼちぼちキッチンに立ってお母さんと一緒に料理はしています。この前、一緒に麻婆豆腐を作ったりして、少しずつお母さんの味も勉強している。朝はちゃんとみそ汁を作れるようになりました… (#12)

4) 「親亡き後」に向けて備えていない状況

他方、【「親亡き後」に向けて備えていない状況】もあった。[一人になっても何とかかなると思うので準備はしない] 【「親亡き後」の具体的なことは

考えていない]という<「親亡き後」の準備はしない>のほか、「親亡き後」について親と話していない[「親亡き後」のことについて友達や仲間と話さない]という<「親亡き後」について話題にしない>ことが含まれていた。また、「親が死ぬことはあまり考えないようにしている」[今考えても先のことは分からないのでその時が来たら考える]という<「親亡き後」は考えないようにしている>ことも語られた。以下は、別居の90代の母がいる一人暮らしの50代男性の<「親亡き後」は考えないようにしている>についての語りである。

…今は自立して生活しているし、母も施設に入っているの最近はあまり会っていない。独立して生活している期間も長いので、母が亡くなったらどうするかとか、心配とかそういうことはあまり考えることはないですね。墓とか葬式とかについては、自分じゃなくて姉とは話し合っているかもしれないけど、そういうことについて姉と話すこともないです。母が死んだら自分の生活がどうなるかということ、想像しにくいというのがあります。(30年前に亡くなった)父と比べたら母親のほうがダメージは大きいかもしれないけど、だからあまり考えたくないとか、考えないようにしているのかもしれないですね… (#9)

5) 「親亡き後」に向けた要望

【「親亡き後」に向けた要望】には、「住まいのバリエーションが増えると良い」[お金の心配をしなくて良いように支援があると良い]など<経済面や住まいに関する支援があると良い>、「困ったときに相談にのってもらいたい」[「親亡き後」のことについて話を聴いてもらいたい]など<「親亡き後」の相談にのってもらいたい>が含まれた。また、「親には「親亡き後」も心の支えになるもの(手紙など)を残してほしい」[事前に財産目録を作っておいてほしい]という<親に準備してもらいたいことがある>という親への要望も話された。その他に<現在の支援を継続して受けられると良い>、<「親亡き後」の生活の実際を知りたい>という要望も含まれていた。以下は、50代の両親と同居している30代の男性の<経済面や住まいに関する支援があると良い>についての語りである。

…親もまだ50代だからあんまりぴんとは来ないけど、親が亡くなったら一人で規則正しくやっていたりかわからないからグループホームかなって思う。住む場所と、今までどおりに年金がちゃんともらえればうれしいな。親亡き後も、今と同じような感じで生活ができたらいいなと思います。(中略)やっぱり障害者というと、イメージ的に結婚もできないし、お金もないし、住む場所もどうしようと思うけれども、もっと支援できるところが増えたらいいなと思う。ここの援護寮は2年までだけど、障害者も高齢者の施設のように、いろんなバリエーションがあるといいと思う。年を取っても、いつまでいてもいいような、そういうのを増やして行ってほしい… (#1)

6) 「現在」の充実・安定

参加者は2)の肯定的な見通しに関連して【「現在」の充実・安定】についても語っていた。これには、「今の生活は充実している」[夢や目標がある]など<現在の生活が充実・安定している>ことや「症状のコントロールができています」[薬をしっかり飲んでいる]など<現在は病状が安定している>こと、「親やきょうだいと話ができる関係性がある」[現在必要な支援を得て生活基盤がある]など<現在は適切なサポートがある>ことが含まれていた。以下は、父の死去後に母が老人ホームに入所し、一人暮らしをしている40代の女性の<現在の生活が充実・安定している>についての語りである。

…父や母の老後とか亡くなった後のこととか、事前に考えたことが全くない。話したこともなかった。父が亡くなって母がホームに入ってから、初めて一人暮らしをすることになって、自分が1人になってみると寂しいことに気が付いて、お金のことやご飯のこととかよりも気持ちの面のほうが大変だったかな。お母さんのことを預けるんじゃないかなと思ったことはあります。だけど、いつまでも親には元気でいてもらいたいけれどもそういうわけにはいかないですもんね。これから先、自分の生活とか人生はどうなるのかな、と思うけど(笑)。今は一人暮らしもできているし、彼や友達もいて、一番充実していると言うか、安定しているから、親が亡くなっても今の状況で暮らしていけたらいいし、なんとかなるか

など思っている… (#4)

7) 「親亡き後」のことへの取り組みづらさ

参加者は4)の「親亡き後」に向けて備えていないことに関連して【「親亡き後」のことへの取り組みづらさ】を述べていた。これには、「親亡き後」について意識したことはない[一人暮らし経験がないので「親亡き後」の生活で何に困るかわからない]など「親亡き後」の生活を想像できないこと、「親亡き後」について話すのは親に失礼だと思う[本当は「親亡き後」について話したいが親とは話しにくい]など「親亡き後」について家族と話しにくいことが含まれていた。以下は70代の両親と同居している40代男性の「親亡き後」について家族と話しにくいことについての語りである。

…親とも(親亡き後について)話したりすることはないです。本当は話したほうがいいんですけど、話がしにくいというのがあります。親から言ってくれれば話すかもしれないけど、まだ何も起こっていないのに、そういうことはちょっと聞きにくいというかね。(親が)エンディングノートみたいなを買っていたような記憶はあるんだけど。僕は目を通さないですけども、母親が父親のほうに、どこに通帳があるとか色んなことを書いといたらどうか勧めたのかな。そういうのを多分、書いているんじゃないかなとは思いますがですけどね… (#7)

8) 「親の介護」の不安

参加者は「親亡き後」の不安とは別に、「親亡き後」に至る前の【「親の介護」の不安】についても語っており、「親亡き後」よりも親の病気が心配【「親亡き後」よりも親の介護が不安】からなる「親亡き後」よりも「親の介護」が不安であることが含まれていた。以下は、70代の両親、弟、子供と同居している40代女性の語りである。

…今は両親とも元気で働いています。父が心筋梗塞で倒れて、次に倒れたらおしまいですと言われてるんです。それだけが心配です。子どもの面倒も見守りつつ、親の介護がそのうち始まると思うんですが、それもしていかなきゃいけないなと思って、それがどうなるか。そのためには安定した体調を整えることが最優先だなと思って。そのためにここの施設を利用しています。ここに来

ることで、リズムが整ってきます… (#11)

9) 「自分の老後」と「自分亡き後」の心配

参加者は「親亡き後」の生活の延長線上にある【「自分の老後」と「自分亡き後」の心配】についても言及した。これには、「自分が年老いたときに今と同じように生活できるか心配」[身体疾患や持病の再発が心配]など「自分の老後」の心配があること、「自分が死んだときに家族に負担や迷惑をかけないようにしたい」[自分の親のことよりも自分が死んだ後の子どものことが心配]という「自分亡き後」の家族の状況が心配であることが含まれていた。以下は、70代の両親共に健在で、独り暮らしをしている40代の女性の「自分の老後」の心配があることについての語りである。

…(別居の)親は元気だからあんまりそういうこと(親が死ぬこと)は考えない。だけど、自分が60とかになって1人になったときに、お掃除できるかしらという悩みがあるんですよ。最近、自分には体力がないなと思って、「年のせいだ」と気付いて。(中略)座っていて立ち上がるときに足が痛くて、シャワーを浴びるときに手を上げるのも痛くてこれも年のせいなんかなとか、だんだん悪くなっていくかなと思って、弱ったなと思って、どうしようかなという、それが悩みですね。老化(笑)。徐々に弱りつつあるという実感ありますね。親が亡くなった後も今の生活がこのまま継続できるといいなと思うけど、だんだん年取っていくじゃないですか。物忘れもひどくなったらどうしようかなとか、そういうことばかり考えている… (#5)

3. 地域で生活する精神障害者の「親亡き後」に関する認識の全体像

「親亡き後」に関する認識の全体像としてのカテゴリ関連図を図1に示す。

地域で生活する精神障害者は、【「親亡き後」に関する不安】の一方で、【「親亡き後」に関する肯定的な見通し】を持っていた。このような不安と肯定的な見通しは、「親亡き後」に向けた備えの状況と相互に影響しあっており、例えば「経済的な見通しが曖昧である」から「お金を貯める」というように、不安があるがゆえに【「親亡き後」に向けて備えている状況】があった。他方、「親亡き後」も何とかなる」と思っているのだから「親亡き後」への準備は

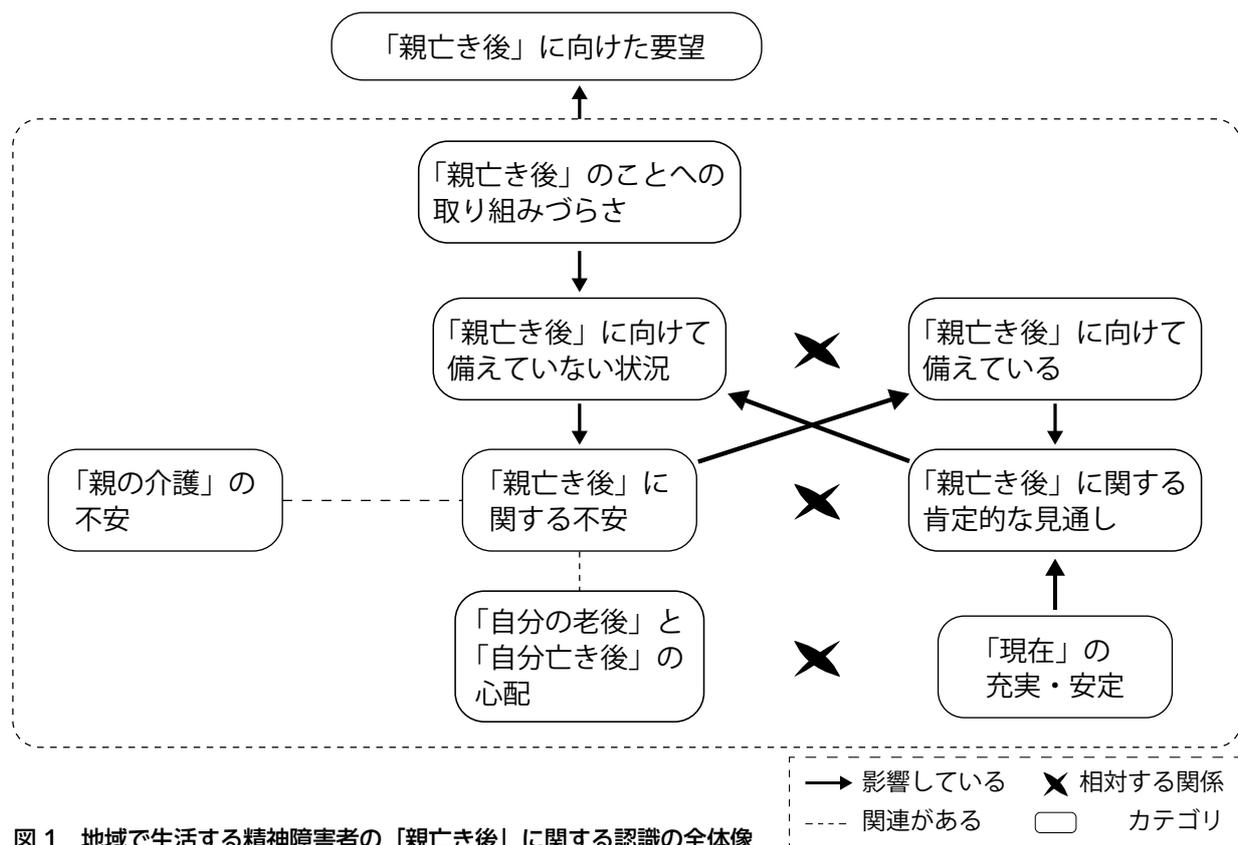


図1 地域で生活する精神障害者の「親亡き後」に関する認識の全体像

しない>というように、肯定的な見通しを持っているから【「親亡き後」に向けて備えていない状況】にあった。さらに、<周囲との関係を築く>ことで<「親亡き後」も相談できる安心感がある>というように【「親亡き後」に向けて備えている状況】は肯定的な見通しに影響し、<「親亡き後」は考えないようにしている>ことで<利用できるサポート知識がない>というように【「親亡き後」に向けて備えていない状況】は不安に影響していることも示された。また、<現在の生活が充実・安定している>と実感しているので<「親亡き後」も何とかなる>と思えるなど【「現在」の充実・安定】が【「親亡き後」に関する肯定的な見通し】を持つことに影響し、<「親亡き後」について家族と話しにくい>ので<「親亡き後」について話題にしない>というように【「親亡き後」のことへの取り組みづらさ】は【「親亡き後」に向けて備えていない状況】に影響していた。そして、「親亡き後」に至る前の【「親の介護」の不安】と「親亡き後」の延長線上にある【「自分の老後」と「自分亡き後」の心配】を抱えており、これらは【「親亡き後」に関する不安】と時間的な流れのなかで関連していた。また、例えば<心理的喪失感が心配である

>から、心の支えになるものなど<親に準備してもらいたいことがある>や、<現在は適切なサポートがある>ことで<「親亡き後」も何とかなる>と思っているので<現在の支援を継続して受けられると良い>と考えているなど、「親亡き後」に関するさまざまな認識が【「親亡き後」に向けた要望】の内容につながっていた。

V. 考察

上記の結果を踏まえて、精神障害者の「親亡き後」に関する支援のあり方について検討する。

1. 「親亡き後」について「話すこと」を支援する

「親亡き後」に関する心配の内容は多岐に亘っていたが、先行研究で示されている親の立場からの心配の内容と概ね重なっていた。しかし、<親の供養の心配>は、親や家族を対象とした研究では示されていない内容であり、子どもの立場である障害者の認識の特徴であると考えられる。そして、「親亡き後」に関する不安に対しては、備えているという認識の一方で、準備はしない、話題にしない、考えないようにしている等、備えていない状況があった。これには【「親亡き後」のことへの取り組みづらさ】が認

識されていたように、「親亡き後」についての想像のしにくさや話しにくさが関連しており、特に親の死について話題にすることの難しさがあることが示唆された。清島ら(2011)は中年期にある人の65.9%が親の終活について親と話をしておらず、親が終活の話を避ける状況や、親の終活に対して困難感、さみしさ、辛さ等の負の感情が伴うことを示している。また、親の死を経験した人を対象としたウェブ調査(株式会社LIFULL senior, 2024)では、97.3%が「親の生前、親との会話が不十分だった話題が何かしらある」と感じており、その理由として「親が話題を避けていた(30.8%)」、「話を切り出すタイミングがわからなかった(29.6%)」、「話す必要性を感じていなかった(28.8%)」が上位に挙がっている。親が健在の人を対象とした同調査では「親の今後について十分に話せていない話題がある理由」として、「話を切り出すタイミングがわからない(27.3%)」、「具体的に何を話せばよいかわからない(25.9%)」、「親が将来の話を避ける(25.6%)」が上位回答となっていた。これらのことから、子どもの立場からは親に対して「親亡き後」について話題にしにくいという状況は一般的で普遍的な課題であるともいえる。

一方、「親亡き後」について話すことに関する親の認識としては、「親亡き後のことについて話し合う準備が本人にはできていないので話し合うのは難しい」と感じていること(石川ら, 2021)や、「親の死について当事者と共有するように努める」家族もいる一方で、親亡き後を話題にすることにより当事者の病状が不安定になることを懸念して言い出せず「親の死について当事者と十分に共有しない道を選ぶ」者もいること(吉岡ら, 2019)が示されている。また、家族を対象とした質問紙調査(石川ら, 2022)では、親亡き後の本人の暮らしについて家族で十分に話し合いをしているものは2.3%、親亡き後、本人がどのような暮らしを望んでいるか把握しているものは9.2%であった。これらのことから、本人と同様に家族・親の側も「親亡き後」について話しにくさを感じることが読み取れる。さらに、精神科訪問看護師の67.1%が本人と家族が親亡き後の将来のことについて相互に話し合えていないと認識していた(小宮ら, 2024)こともあり、家族間で「親亡き後」について話題にして話し合うことの難しさは課題の一つであると推察する。

現代日本においては、死について家族で死の問題を話し合うことを避け、タブー化しておきたいという気持ちを持つ人々がまだ多いとの指摘もある(坂本, 2013)。そのため、「親亡き後」に関しては、家族間で話題にすることが難しい状況があることを考慮しつつ、障害者本人に対しては、「親亡き後」について家族と話したい気持ちがあるか確認する、「親亡き後」の実際の生活について話を聴く機会を設ける、支援者も同様の課題を持つ者として「親亡き後」について対話する、SST(Social Skills Training)やグループ活動等を通して仲間と「親亡き後」についてざっくばらんに話す機会をサポートする、など段階を踏んで「親亡き後」について「話すこと」を支援する必要があると考える。

2. 「現在」の生活の充実と安定を支援する

本研究では、「親亡き後」に関して、不安や心配だけでなく肯定的な見通しも語られた。それらには現在の生活において家族や周囲から適切なサポートがあること、現在の病状や体調が安定していること、現在の生活が充実していることが関連していた。この現在の生活の充実と安定は、自分で決めた希望する人生、夢、目標の達成を目指すパーソナル・リカバリー(Slade, et al, 2015)と関連していると考えられ、本研究の参加者はこのパーソナル・リカバリーのプロセスを歩んでいる人たちであると推察された。これには、本研究の参加者の選定条件である病状が安定していて地域生活を1年以上継続しており、日ごろからピアサポート活動等を行っている者であることが影響していると考えられる。「親亡き後」はこれから先の未来のことであり、それに対して備えることは重要なことである。一方で、「今考えても先のことはわからないので、その時が来たら考える」という対象者の語りのおり、先のことはどうなるか誰にもわからないため、いくら備えても心配や不安はゼロにはならない。そのため、家族や周囲と良好な関係を築き、適切なサポートとつながり、病氣と上手に付き合いながら、やりたいことや目標に向かって充実した日々を送ること、そしてそのような日々が継続することを支援すること、すなわち「今、ここ」の当事者の生活に焦点をあて本人が希望や生きがいを感じられる生活を目指すリカバリー志向を基盤に支援することが、「親亡き後」もやっていけるという自信や安心感につながる可能性がある。

3. 長期的なライフプランを共に考える

本研究では、精神障害者が「親亡き後」をどのように認識しているのかについて焦点をあててインタビューを実施したが、語りの中には親が亡くなった後のことだけでなく、そこに至る前に予測される親の老後への心配や自分に親の介護ができるだろうかという不安が含まれていた。これらは家族や親の認識には含まれていなかったが、当事者にとっては「親亡き後」とは切り離せない地続きの心配ごとであると思われる。

さらに、本研究では自分の老後の不安や自分亡き後の家族への配慮についても表出されたが、家族を対象とした先行研究では障害者である子どもの老後やその子どもの死後のことまでは言及されていない。親や家族が「親亡き後」について語るときはこれらの視点はあまり想定されていない可能性があるが、本人たちにとっては「親亡き後」の生活の延長線上にある懸念であると考えられる。

本研究の対象者12名のうち9名は40歳代～50歳代であり、特にこのような中年期から向老期にある人たちにとっては、「親亡き後」について考えるとき、親の老後や介護、自分の老後や自分亡き後への配慮は、重要な視点であることが示唆された。そのため、親の死去に伴う様々な変化に対応していくことだけでなく、「親亡き後」に至るまでの親の老後の生活や介護の問題やさらにその先の当事者自身の老後も含め、家族全体の長期的なライフプランを共に考えていくような支援の必要性が示唆された。

4. 本研究の限界と意義

研究の対象者は地域で様々なサービスやサポートを得ながら安定して生活をしている人たちであることが、データに影響している可能性がある。しかしながら、親の立場から語られることの多かった「親亡き後」について、精神障害を持つ当事者の認識の一端を明らかにすることができた。これにより、精神障害者の親亡き後に関する認識を踏まえた支援ニーズを理解し、具体的な支援について検討するための基礎データを得ることができたと考えられる。今後は、本研究における支援のあり方の検討を踏まえて、具体的な支援方法を考案し実践的に取り組んでいくことが課題である。

付記

本論文の一部を第40回日本看護科学学会学術集会にて報告した。

謝辞・研究助成

本研究にご協力いただきました対象者の皆様に深く感謝いたします。本研究は、JSPS科研費18K10282の助成を受けて実施したものである。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

文献

- 地域精神保健福祉機構. (2017). 精神障害を持つ人のための親なき後に備える. 70-71, 認定特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構, 千葉.
- 石川かおり, 眞榮和紘, 永井知子. (2021). 精神障害者の親亡き後のことに関する親の認識－親の語りの分析から－. 岐阜県立看護大学紀要, 21(1), 3-13.
- 石川かおり, 眞榮和紘, 永井知子. (2022). 精神障害者の親亡き後の生活に関する家族の心配ごとに焦点をあてた支援セミナーの試み. 岐阜県立看護大学紀要, 22(1), 51-60.
- 株式会社LIFULL senior. (2024). 親と話したい“親の今後”にまつわる話題に関する調査. 2024-8-31. <https://m-ihinseiri.jp/article-service/news/0005/>
- 清島佑菜, 桐祥子, 田中沙幸ほか. (2011). 中年期にある人の「親の終活」の捉え方と自身の終活への関心. キャリアと看護研究, 11(1), 37-46.
- 小宮浩美, 石川かおり. (2024). 精神障害者の「家族亡き後」のことに関する精神科訪問看護師の認識と支援. 日本精神保健看護学会誌, 33(1), 106-114.
- 厚生労働省 これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会. (2017). これからの精神保健医療福祉のあり方に関する検討会報告書. 2024-8-3. <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000152029.html>
- 厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部. (2018). 平成28年度生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）. 2024-8-3. https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/seikatsu_chousa_h28.html

- 大分精神障害者就労推進ネットワーク. (2015). 精神障がい者と家族のための「親なきあと」支援マニュアル; 「だいじょうぶ」と言えるために. 2024-8-3. <http://sasaeau.net/data.html>
- 大分精神障害者就労推進ネットワーク. (2016). 精神障がい者と家族のための「親なきあと」支援マニュアル2実践編; 「親なきあと」は自立with支援で. 2024-8-3. <http://sasaeau.net/data.html>
- 坂本佳鶴恵. (2013). 現代日本の死生観－末期がん患者の死の「受容」と死生観をめぐって. お茶の水女子大学人文科学研究, 9, 59-70.
- 猿田忠寿, 土橋舞子, 堀内美穂子ほか. (2010). 地域家族会の現状と今後の課題について～家族が抱える親亡き後の不安～. 精神保健シリーズ, 40, 8-12.
- Slade, M., Longden, E. (2015). Empirical evidence about recovery and mental health. BMC Psychiatry, 15(1), 1-14.
- 吉岡京子, 黒田真理子, 篁宗一ほか. (2019). 親亡き後の精神障害者の地域生活を見据えた親の準備の解明. 日本公衆衛生雑誌, 66(2), 76-87.

Perceptions of “Life After the Death of Parents” Among Community-dwelling Individuals with Mental Disabilities

Kaori Ishikawa, Reiko Kuzuya and Miku Takahashi

Gifu College of Nursing

● Abstract ●

This study aimed to explore how community-dwelling individuals with mental disabilities perceive “life after the death of parents” and identify the challenges in supporting them through this transition.

Twelve individuals with mental disabilities living in the community participated in the study. Semi-structured interviews were conducted to understand their views on “life after the death of parents,” and data were qualitatively analyzed using an inductive approach.

The study revealed nine categories related to their perceptions: [anxieties about “life after the death of parents”], [positive outlooks on “life after the death of parents”], [preparedness for “life after the death of parents”], [lack of preparedness for “life after the death of parents”], [requests regarding “life after the death of parents”], [fulfillment and stability in the “present”], [difficulty in addressing “life after the death of parents”], [anxiety about “caring for the parents”], and [concerns about “one’s own old age” and “after one’s death”]. The relationships among these categories were analyzed to form an overall perception of “life after the death of parents” among individuals with mental disabilities.

The findings suggest several support strategies: to support “talking” about “life after the death of parents” gradually, considering the difficulty of discussing this topic, focus on supporting the fulfillment and stability of “the present,” as it leads to a positive outlook on “life after the death of parents,” and collaboratively developing a long-term life plan, as concerns about parent care and personal aging are closely connected to anxieties about “life after the death of parents.”

Keywords: individuals with mental disabilities, community-dwelling, life after the death of parents, Perceptions
